

ENGAWA

平成25年度 第2号



■表紙のことば

市民協働センターの事業である『夢創造人（ドリームクリエイター）養成講座』。今年度は次代の市民活動を担う人材育成を目指して、浜松市立東部中学校と協働し、生徒の皆さんを受講生に迎えています。

第1回目はNPO法人“浜松緑のカーテン応援団”を講師に迎え、東部中学校で緑のカーテンづくりに取り組みました。実際に土に触れ、植物を育てる活動を通し、受講生は身の回りの緑に対する関心が高まった様子。活動後には『学校任せにせず、自分たちの手で緑のカーテンを育てていきたい』という内容の感想を多く頂きました。

目次

◆ 特集 パートナーシップ・ミーティング2013

7月12日から14日に行われた
パートナーシップ・ミーティング。
協働のパートナーを見つけ、道を

切り拓こうと行動するNPO・企業・
行政・学生の姿を通し、つながり
がもたらす可能性について考えま
す。

ページ2-4

◆ エンガワピックス

・中山間地域で光る、若者の力
ページ5

◆ Check！！

・市民協働センターのお知らせ
・4コマ『ひよっこ』 ページ6

浜松市で芽生える協働のタネ



事業を提案した『フレッシュアクティブコミュニケーションセンター』の山本さん(左)と『有限会社ありがとう』の黒柳さん(右)

7月12日～14日の3日間にわたり、市民協働センターにて、『パートナーシップ・ミーティング』が開催されました。市民活動団体、企業、行政がつながりをつくる場として、今年で4回目を迎えます。

今号では、同イベントの柱となる『プレゼンテーションフォーラム』をはじめ、『企業のCSRフォーラム』『学生自由討論会』を中心に会場の様子を伝えます。

市民活動団体や行政、企業などが協働事業のアイデアを発表する『プレゼンテーションフォーラム』。

新たなつながりの中で社会問題を解決したり、事業を発展させたり、という熱い思いを持った人々が、市民協働センターに集まりました。

企業とNPOの協働

今年度の特徴として、市民活動団体と積極的につながろうとする企業からの提案が、例年に比べ多かったことが挙げられます。例えば、飲食業を営む「有限会社ありがとう」は自社のPRのために用意したラジオの番組枠を、市民活動団体がPRするための場として提供することを提案しました。

代表の黒柳さんは、『自分たちの宣伝ばかりするのではなく、地元企業として、地域で頑張る市民団体を応援したい』と、その思いを語りました。地域全体

が元気になることで、巡り巡って自分たちの企業自身も元気になるという自論が今回の提案につながりました。

地域を盛り上げるパートナー

遊休農地でひまわりを育てる活動をしている「ひまわり2525プロジェクト」は、遠鉄百貨店25周年の記念イベントを盛り上げるため、共に活動してくれる団体を募集しました。

この事業のきっかけは、遠鉄百貨店が「25周年」にちなんだ事柄を調べる中で、名前に「25」が付く同団体を知ったことが始まり。企業からのオファーによるものでした。

企業の周年イベントを共に盛り上げる仲間として、地域の市民活動団体を選んだという今回の件。このことは、企業の社会貢献意識の高まりや、市民活動団体を“協働のパートナー”として捉え始めていることの現れなのではないでしょうか。

“協力”？ “協働”？

市民活動団体の発表は、資金や場所の提供、活動への理解を求める、協力や支援をお願いする提案が多数を占めています。

相手の立場を理解し、対等な立場で双方に有益な成果を生み出してこそ、“協働”事業と成り得ます。

自身の市民活動の強みを充分理解し、企業をうならせる新しい提案を、来年度に期待します。



ひまわり2525プロジェクトの中村さん



市民団体、企業など、会場は多くの聴講者でにぎわった

パートナーシップ・ミーティング2013 企業の社会貢献フォーラム・はままつレポート

社会を変える企業のチカラとは

パートナーシップ・ミーティング初日、遠州地域における企業の社会貢献についてのフォーラムが開催されました。多くの企業が取り組んでいる社会貢献活動は、社会に対してどのような影響力を持つのでしょうか。

企業も市民の一員

フォーラムでは最初に、静岡文化芸術大学の下澤教授による、企業の社会貢献活動の研究報告が行われました。

研究対象は遠州地域の企業168社。その中でも、コミュニティの社会的、経済的発展に寄与した活動事例として紹介されたのが、浜松信用金庫、ヤマハ株式会社、株式会社都田建設、N.P.O.プレンティアの森、株式会社Peerの5団体です。

下澤教授は、5団体の共通点として『企業も市民の一人として社会に関ろう』という意識を持っている点を挙げ、今回のフォーラムのテーマだと語りました。

大切な3本柱

研究報告終了後、5団体の各担当者による社会貢献活動の発表がありました。その中で3団体が特に強調していたのが、「収益事業」「社会貢献活動」「社員」の関係です。

株式会社都田建設社長の蓬台さんは、それら3つは「切っても切れない関係」と語りました。浜松信用金庫の北嶋さん、ヤマハ株式会社の吉岡さんも同様の考えを語り、社会貢献活動を通して地域社会と関わることで、『社員の社会的感度が上がり、より良い仕事や企業活動につながるのではないかと説明しました。

このような意識を持った企業活動は人づくりにつながり、ひいては地域社会を変えるチカラとして生きてくるのではないのでしょうか。



株式会社呉竹荘、情報誌エコノワ編集室、浜松市市民協働センターの各代表者によるパネルディスカッションが行われた。

みんなで支える社会

各企業がチカラを付けるだけでなく、それを社会につなげていく必要性を指摘したのは、N.P.O.プレンティアの森の水野さん。個々が取り組んでいるボランティア活動の『楽しさ』を『社会に役立つこと』につなげなければ、社会は変わらないといいます。

株式会社Peer代表の佐藤さんは、『それぞれの地域事業者が少しだけ気を配る範囲を広げることで、地域全体を支えられるのではないかと語りました。企業のチカラをつなぐことで、地域社会を支える市民のネットワークがより広く強いものになる可能性があるということも、2団体は指摘していました。

連携への課題

事例発表を通し、企業のチカラに期待が高まる一方、フォーラムの最後に行われたパネルディスカッションでは、NPOとの連携による社会貢献活動の可能性について、課題が残るとの指摘がありました。

その理由として、『NPOは思いや志は高いが、事業をいかに継続させていくかが弱い』と感じる企業が多いことが挙げられました。

地域に生きる同じ『市民』として、両者の連携は今後の社会を支える上で重要と考えられますが、「継続性」が壁となっている現状が明らかになりました。

継続するチカラを

事例発表で共通していた、社会貢献活動を単なる慈善活動と捉えない積極的な姿勢。ここからは、多くの学ぶべき点があります。

一方で、企業とNPOの連携には未だ多くの課題があります。今後、継続的な活動を通して市民団体が力を付け、地域を支えるネットワークを企業と構築していくことが、地域の活力となっていくのではないのでしょうか。



研究報告をする下澤教授

学生たちよ！思いを地域に灯せ！！

奥田 文子さん
静岡大学 教育学部 3年

加藤 胡桃さん
静岡文化芸術大学
文化政策学部 3年

安達 寛恵さん
聖隷クリストファー大学
看護学部 3年

安田 愛実さん
静岡文化芸術大学
文化政策学部 3年

ディマス プラディさん
浜松学院大学
現代コミュニケーション学部 4年

細井 一さん
常葉大学浜松キャンパス
健康プロデュース学部 4年

天野 紗希さん
静岡文化芸術大学
文化政策学部 3年

大藪 政伍さん
静岡大学 工学部 4年

パートナーシップ・ミーティング2日目。社会貢献活動に携わる県内の大学生8人が集まり、討論会を開催しました。彼らが日ごろ感じている社会への思いとは？2時間を超える熱い議論が交わされました。

『大人って無関心！』

東北復興支援をする学生団体の副代表を務める加藤さん。親しい大学の職員さえ、学生の活動を全く把握していないことを知り、『いかに学生のことを見てないのか』と感じたそうです。

『もっと自分たちの活動を知ってサポートして欲しい。活動が広がることによって大学の知名度に貢献できるのなら、学生のことを使ってくれて構わない。』と、大学との関わりについて率直な意見を述べました。



時に激しく、時に和やかに討論会は進んだ。

ワクワクする気持ち

大学のボランティアサークルの代表を務める細井さんは、「(ボランティア活動での)ずっとワクワクしている気持ちがたまらなくて、こういう学生がどんどん増えていくんじゃないかな。」と、現在の熱い思いを語りました。

2人の発言からは、学生による社会貢献活動への理解が進み、将来的にさらなる広がりが生まれることを望む気持ちが伝わりました。

活動の壁…？

しかし、企業や行政などに関わるなかで、活動に不自由を感じる学生も少なくないようです。

『なにをするにも書類の提出や報告を求められて、やりたいことが進まない。』『許可に時間がかかる』など、他の機関と関わる上での壁を訴えました。

活動にスピード感を求める学生ゆえに、行政や大学には頼らないという発言も目立った今回の討論。

コーディネーターの堀さんは、『公的機関はきみたちと社会をつなげて、守ってくれている、いわばセーフティネット。そのおかげで活動する場があることを理解し

ておいてほしい。』と指摘。自分たちの活動への理解を求めるだけでなく、社会に対する理解を深める必要があることを示しました。

“当たり前”ってなんだろう

外国人支援に取り組む奥田さんは、お互いの“当たり前”が通用しない場面に多々遭遇するといいます。『日本人だったら考えられないこともあります。それが彼らの当たり前なのかな。』と文化の違いを受け入れる姿勢がうかがえました。これを受けて堀さんは、他の組織と関わるうえでも『相手の立場に立って理解し、尊重することが大切』と強調しました。

今回の討論の内容は、学生だけでなく、市民活動に取り組む私たちも改めて意識すべき点ではないでしょうか。今までうまくいかなかった連携が、動き出すきっかけとなるかもしれません。



司会の堀永乃さん、話にも熱が入る。

中山間地域で光る、若者の力

鹿島の花火大会にぎやかし応援団



観客動員8万人！しかし…

天竜観光協会が主催する“鹿島の花火大会”例年約8万人の観客を動員する、天竜区最大の規模を誇る花火大会です。

しかし近年、高齢化率が37%を超える地区ということもあり、年々運営に携わる人が減少、このためイベントを運営するのが難しくなっています。

そんな天竜をなんとか活気づけようと昨年度から始まったのが、“鹿島の花火大会にぎやかし応援団”の派遣です。

天竜に若い力を！

『まちなかの若い人たちに手伝いにきてもらうことはできないか？』と、観光協会の神谷征男会長から市民協働センターに初めて依頼があったのは、昨年5月のことでした。花火大会の開催は決まったものの、地元の人たちだけでは人手が足りない。炎天下での設営作業は、高齢の会員には負担が大きい。

そんな現状をなんとかしたいとの思いを受け、市民協働センターが窓口となり、初めてボランティアの募集を行うことになりました。

当初、観光協会からは、『こんな田舎に手伝いに来てくれる人な

んでいるのだろうか？』と、不安の声が聞かれました。しかしそんな心配をよそに、学生と社会人あわせて5名の若者が、募集に手を挙げてくれました。

『今年もはっぴが着たい』

活動は観覧席の設営にはじまり、観客の案内・誘導・警備など、決して楽な作業ばかりではありません。しかし参加者からは、「ふだん、外で活動することが少ないので、とても新鮮でした。」「地域の方と一緒に活動できて本当に楽しかった。」といった感想が寄せられました。

2度目の募集となった今年も新たに5名の参加者が集まり、多くの来場者にも丁寧な対応で、運営を支えてくれました。なかには、『今年も観光協会のはっぴが着たい！』と、2年続けての参加をしてくれた人もいます。

ボランティア参加の特典は毎回、当日の食事とお茶、そして観覧席



券1枚。これしか出せなくて申し訳ないと気にかける観光協会に対し、参加者はもらったもの以上の充実感を得てくれたようでした。



これからのために

若者の参加により、運営に活気を取り戻しつつある鹿島の花火大会。活動を楽しめる工夫と、受け入れる側の気持ち次第で、若い人材を地域や市民活動に巻き込んでいくことが可能であると再確認することができました。

ただ、今回の活動を単発のイベントとして終わらせたくはありません。参加してくれた若い人材を、いかにして地域に根付かせていくかが、今後の課題として見えてきました。

Check!!



今年は「読書の秋」にしてみませんか？



「スポーツ」「食欲」など様々な秋がありますが、センターからおすすめしたいのは「読書」の秋

●センター2階のアトリエでは、NPOやボランティア関係の実用書から、CSRの事例本、パソコンの教本など、市民活動に関連した本を多数用意しています。本年度はNPO法人『ボランティア支援ネットワーク パレット』代表の野尻様より本を寄贈いただき、数も種類も豊富になりました。

●本はアトリエ内で自由に読んでいただいて構いません。読み終わりましたら元の場所に戻してくださいね。

●ご自宅でゆっくり読みたい場合には貸出もしております。期間は2週間で、一度に4冊まで貸出できます。

センターの小さな図書館をぜひご利用ください！



メルマガ登録募集中!!

市民協働センターでは、全国から集まる助成金情報や、イベント情報などを、メルマガでお届けしています。更に、市民協働センター登録団体になっていただくと、当センターのメルマガ購読者への情報配信も承ります。メルマガ&団体登録をしてみませんか？

登録は市民協働センターホームページから。「浜松市市民協働センターメルマガ」でご検索ください。

市民協働センターの情報はこちらから

facebook



blog

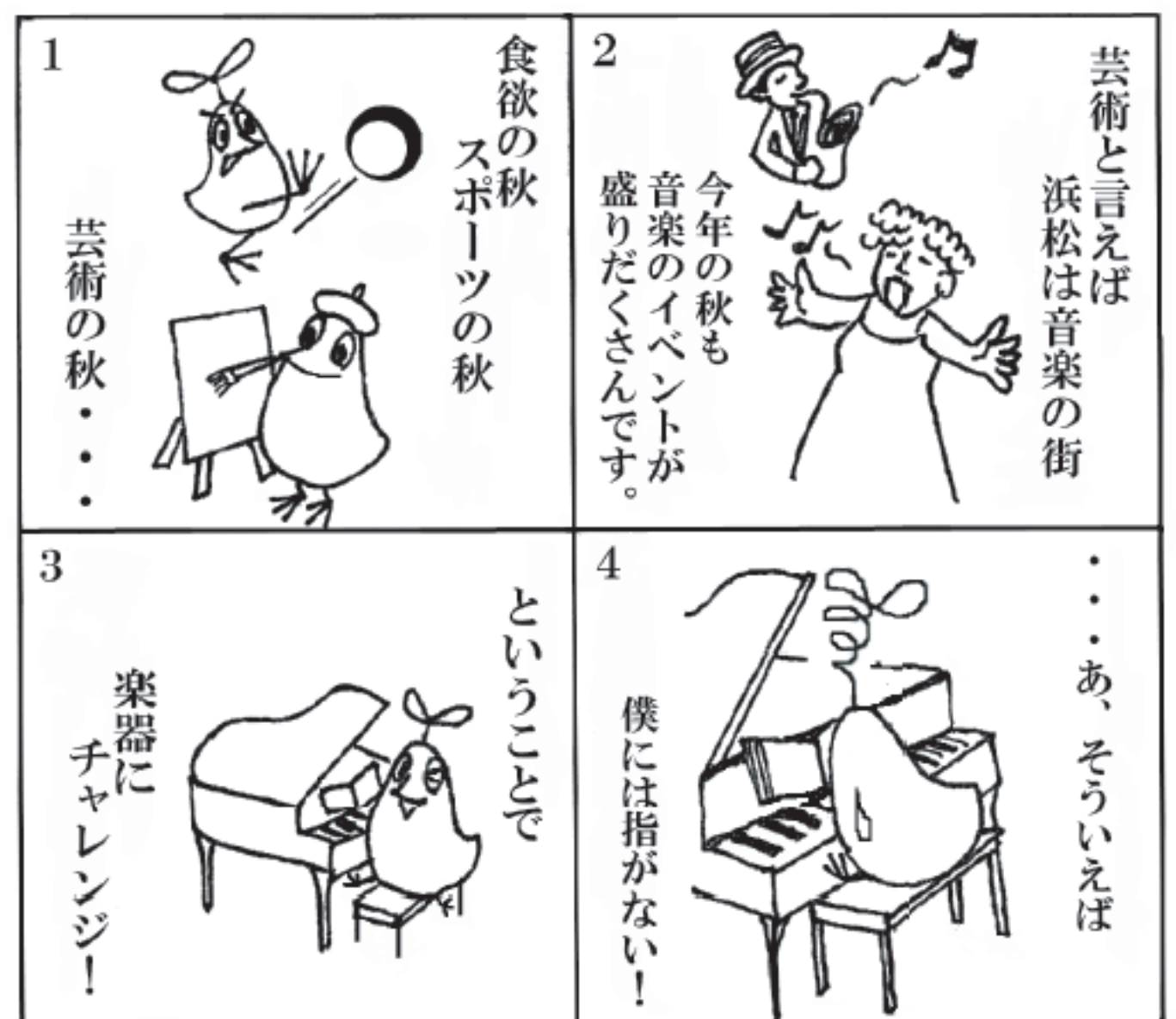


twitter



4コマ ひよっこ

ちょっとひと息、4コマ漫画です。



発行 浜松市市民協働センター 〒430-0929 浜松市中区中央一丁目13-3
電話 053-457-2616 FAX 053-457-2617

[URL] <http://www.machien-hamamatsu.jp/> [E-Mail] kyoudou@machien-hamamatsu.jp